繪本
敵討
岩見英雄錄
三編
七

遠
2509
35-21

遠
2509
33-21

繪本復讐英雄録三編巻之七

重太郎法師異事

其頃紀中高山の城主八幡奥守生忠ありしが。藩中ふも武道を慶の士多くありしが中に。角弥、毋宮良吉といへるものあり一度武術の師範たりしが。忠の側にて后。毋家の微きを忌じ。級乃の師と作られて。藩中を殺授す。長子を壱九郎と号して。齢年二十二才にして。二男を虎之助良忠とて。十四才にてなりしが。角弥。毋家を亡ぼすと。彼毋河の孫恵とを伝く。武ごろ社怪事の数物語る。人先づ長子壱九郎と号し。とら寅なる惟くるを守らせられども。夢よりも切なるたぐ

震慄ふるひて。歌をあらに而已なりうるふ。聴昔の歌。角力
ぐらふ動く。告る者有て曰。彼し此町醫なる。本田屋喜助
ど会ふ。武者修行の者帰国いく居。それより今朝立喜助
ようう。喜助氏の怪異乃ひ。歌仰のうなぶく。清うひしふ彼武
者修行の者。是と聴く。まい歌仰の亮。我郷未聴るぶ故
ふ。怪異張らざるりと。禀ろしふ。即なりうと對へく。
歌仰のうさぐくの。出帰らもてる仕形とまの似く。皆こ言多
ふ。郷うらひひと。本田屋の下女。次の男ふりて。これと少
る。隣家へ行て。彼と清りひひしよう。先ぐよ浩とるうて
ひぶ。行程。是修行者の曰。ぐ一理の也と。人にこと
禀ひ。うとぐ清りる。角力ぐ債これと聴く打

るるつ紀。実ぐるるるう。彼る怪異ハ武と仰ぐて制ぐ。れ
まと。ぐ実仰ざるふ。実る本出ふ。まの動ざるふ。ふ
べきるるのまば。今予ふ告ることと。作て波法るてるう
まと告る者と制ぐて。ぐ者ふ者紀思ぶ方ふ。
て。是波ふ家修ぐて。之の歌ハ本田屋るたうて。経仰
者思ぐと。やぐんと報。歌仰る仰ぐ。一怪異と張ぐ。紀ぐと
修て附べ。又同仰る我慄ぐ帰て。怪異の張ぐ。喝ぐ第ひ
る不紀とぐめく。本田屋と追排ぐ。喝ぐのはと叫ぐ
て。彼者波と実ぐ。ぐ帰りる。まぐて。思波実今
朝自ら本田屋るるう。屋るのぐ。逐ふ彼ぐ張ぐと引き
よせるるう。かる計技のひりぐふ張ぐるも

あらねば業因よりなりて悪源の里よりいろいろふ。主従恩愛
うやうやしく出迎。奴婢のものも後と呼うして一座よりなじ
ろう。主人宗左衛門はてよろう。績あろうとろうれ。宗右衛門
家と呼人。間髪をもたなく婦とはろうなて。付女ア繁多など
病床よりものもくそろそろ指もこころ。主従恩改め法知く
殷勤よりて宗左衛の本陣と謝し。茶菓とすめてのち。雪女
音沈の發病ようして。今ふいろうやその病状とかろ法医
よりて薬ともひもくず。物騒の強もあるべ。為御名さん。雲
の武名と慕ひて。一家のおらん屋を那ひ。まうし不。出仕家務ろう
雖有仕合ひとて。呼くもも本陣と謝ろう。宗右衛門も進
礼を述べ曰。今嬢実病と伝て。主人憂患の祝。既る本田氏よりも承

知仕まつ不肖なりろう。宗右衛門をべさの間必るかまへ。
ろく。自ろくてぞ病ろる為より法本家。
早くも快ると仰ん。今有御せんろう武士者。
奴平。ろよ。絶て雪隠て面も拭あげぬぞ。家あけるべ遠
ろまろんずして。角弱者九命と思め。蒙山元兵。沢食ホ十命。大海
嘯義。血乳雪ん。の若者。縁の遠ようろ。ひ見ろ。警護破る
ける高ホ。て主従恩。自重とろ。出。績て。盛饌佳肴とつろ
て。宗右衛門。ぞ。ろて。本田屋敷も未席ホ進んで。程ろと
ぞ。祝のちろるおどよ。知文も既よろろう。宗右衛門対て
宗四ざろ。孔孟と。宗いろ。酸味主て。ろ
主人盃と納めろと。辞ろれば。仰恵の曰。実ホ田舎の没

定太郎
恵河の里に
ゆく図

廉来の色。固辞すらんも却而不礼まん。弾正側の明朝ふる手付
ひんべ。そろ金ふ程せヤべ。しして盃と納め。雨〳〵沙汰せく
情。あぐ沙〳〵ひんぐも。奥の間病床の傍ふ入ヤそうべし
酔ふちゆの後も。いそせ動てひんとヤクれば。手そ兵芸ふ
そして。彼ら業用ろべしと。然〳〵と記よれば。弾恵。芸術者
ちそ〳〵。廊ヤよう。ぎきそる。少年愛ふ妻用ら。主者神
彼〳〵られとるふ。彼男女の居間ら。廉風と建かそるぶ
側ふ伝女も伝。望ら後ま。ぐうを居ぐて〳〵せこ設〳〵
史弾るぐ。そうう。弾恵者ふ。一夜
ふ着ぐけと。彼ひなる也と。ヤクれば。主者ら居こうて。曰。
主人ふ。彼ね廉恵ふる図ふる。平き〳〵男女廉を同うぐと

強ふ。ヤ西ハ国門ならべやた。病害こうも。是時人ふと
ぐ〳〵ふ廉風とへぐて〳〵。彼ふ歌と伝ハ。弾恵。主者ふの
怪異ふ伝〳〵。西山の廉ふ。ヤ主ん手。疾次の間ふ蒲団と補せられ
ふ。平有姉〳〵て歌と伝ふん。それ〳〵。車ふ是やべ〳〵ヤ
られば。弾恵畏て曰。伝ふて。ひんぐも。浅茶歌伽と称る。薩中
武辺のかぐ〳〵も。皆彼のやく〳〵。廉風の後ふ。ヤて叢ふちう
ひ〳〵なり。まさ人戦慄ハ止ぐ〳〵ものと。ヤクれた
ふそそ。微笑〳〵。否。是ヤでのうぐ〳〵いうふもあれ。茶ハ同
廉ハ為ぐ。只。後の間ふ〳〵ぐ〳〵ふ。ヤうぐて寝うべし。まと君と
思うれたべ。余人と歌まれよ。茶ハ本田屋へ移るべ〳〵。
酔ふ紀んとすると。弾恵恐て遁安。純とひんて曰。平でう伝ふ

肖まんや。何事にか。なるよ。主人。こゝ。係よりの如くして。次のゝ
ゝ。歌床と設。掛げ。金とて。主人。おくんやうく。
主人。こゝ。好らで。去来。えぜられよ。系いく。孫ゝ。
ゝて。本田氏も。孫を。孫ら。ゝれよゝて。主人。ゝ。ゝ。抱き。金
引。ゝぶゝてぞ。ゝ。ゝ。ゝ

適怪を笑るゝとゝ。弟復ずべ復変のたらんも計れば。その
時伽の家よりかたるべきなるゆ。まゝそんと獲べ伽べし。復
来出ると告げば。今日なるこの孤を都て遠家へ。出田屋
を迎べゝとて。固辞而義伽と訓て席を出れば。孤あいまの婦
家内の者も。遊られ御さく。とゝ報回附して。門邪まで送りく。於
家長及び奴僕者人と引添て。出田屋へ送らやけり。かくて
宮方に出田屋より頃りられば。義助が妻の事ゆ此歌の頃
語りゆのもて復よ収びたゆ。又宮方の居ふ動りて。その為と謝し
実よ者の武流よ絡く。妖怪たちどころふ語り。来よいるを
面と記しゆ史と。且収び已賞しられば。弟方宮方莞ふこして
孤ならんやと。其方の孤よ動ゆとんはらん

者の伽とたゝば。連くに語るべゝ。弟遊家よ宿りしよう日く
小孤狐と俳徊而。絵図孤の道場とうかゞひうれ。出妖怪
を結るわゞの孤魔の人とゝ。蝶ひゞ死事なり。孤ふ人
来と送う。まりし。思ふの奴僕笑ふ伽りし乎と宮べ義助
對く曰。者ふ小ふゆのひし伽。出よ伽りひとゝいへば。宮方宮の曰。
孤らば宮弟とかゝりゆきん。孤不閑ゆ。許ま婦の屋志
と蒙う。伽りう殘而なく意迎まう。孤らばゆ。孤れ
用臣。於よ今ゆ迷よ出ゆ。義助の妻の事ゆ此歌の頃
又発弾の方へ除く。漏くふよ方へ意ん。と歌。孤縁して意変
日と送らば。孤小の妨あるべしと。中ゆ出べ。夫婦方ふ語る孤。そゆ意
の報。家獲ゆ伽とゞも。せめく今一日ハ。休らひゆてそ出ゆ一せ

あるべき。とまこのようもの乳まうふんのものと。程くに
尚められば。市右衛門色を変じて。怪異と結ぶ。事あらめ
でうべしと云て旅の装束。早打立べく英雄の凛くたる威
風に感じ。本田屋まで婦も止るふりをして。そうむいて歩り
しが。若四郎で曰。彼ばかりあて抑留をもらんもはるか宵の口れ
あるべ。伴は仕せをもらんが。汝。来よう那ひをすることをば。
てや上しうと。見えひ。拙者の回里は加別淺ましてひが。今は又も没し
見除七郎とや共お嬢いうしひ。是へ久く跡をよるしひが。ばごろ
彷ひ後部ふひ。拙しも君が仇知と伴として。淺を五供仕こ
是見る体七郎。幼年ようの御武御ようんがけひ者として出へ

入せあらんと。欲い雀躍いうしいるれば。首級ひやるの浮宮の祝
那ひなること。思ひ入て那ひられば。市右衛門 市右衛門。是は
何ふても。命を遣らんとて。那ひに云るうちうと。家をよるる志
と欲び。まい結旅の支ろう。手は満足くなれども。家内の要用さ
爾ふん。力自のあるくは何あらんと中せば。番女をとつて曰
若ひ内をとる命ひて。家事の用ひ。書をうひらん事ひ
ひ。ひ。書爾ふもひらばひひくくひ。徒浮宮をせるくて。夫婦
平分ひて。返きるが。若四郎座ふ旅装して出まり。右衛門や
ひ。仕ひらんとて。市右衛門が草鞋をも出して。勇で首途を催
ば。市右衛門を迷ると感ん。先本田屋の素番女と思ひ。家の
奴婦ふひ。祝中の意志と謝まくく謝ひと遣くて。知れば内

入

の其ども一同よなごうと情て門の外までぞ送りいでうの
蓋開れ宮方の緒畏と紅蓮の色を一ツふ拾て肩よりかけ
跡をば妻に託し給。今宵は所存を行て。延命ちふて止まべ
くれば。ものあとうつ者を見る人あらば。此世と告よとし
ゝ。彼のるゝも云のこゝ。宮方の後より引添出て行。英雄義俠
の迷なる。桑見の行ぞ勇しゝ。茲より又。思ひの里あくの宮方に
仰ようして。一教怪見の奉うしるを教びられば。此ゆゑ後くも
ふゝくよきこゝ廣ごうして。是宮方の武徳を崇し。たゝくへ
ろうもどふ。恨未思ひのうて歌仰乃者ども。と閉て。狂の者ど
抱るゝ。親族の。お移て。弘恵ゞ方ふ見ゝ。彼者ゝ。ゆゝ
待くと云業と飾りて曰。佐も昔の歌。嵩家ふ和ひ

の者ども。ふ。さきで武乃ふ秀ろう男ろる
見ざるふ。吉深殿の関門移なり。只金彼妖怪。毎夜。家ゝ
ろる武國よ怖れて来らざりしまり。そ和ろうの歌よ知られし
て。仰なりゝろう。這奴男ろん這体を獲ろうまり。そ和ろ這奴
始ようゝ。決の乃ふ和て前ろる。ろ。爭それを歌仰や、
云ん平。陰未の家ゝゞ仰ん。嶽を。ふ。瞬目の乃ふ。ものを
ゆりさびしゝく。すろゝふても怪ゝさとんを。切をてんとろて
撫ろう。さろふ仰ゝ妖怪も恐怖をなし。荏苒と此歌ろう
退きろるまりと。砌をも。いとそびゝ。湾島ふ濃つらゝるふ思ろ
深恵。絶も在ちんやとれ思へども。ろれゝまで毎夜帰しろう。
事の形ふろに止しん。吏に此人ゝの力とも思ろれねど。

あらともいつらへで思慮して居こうしろ。行ゐひう〳〵
あるざ　ふい　ゆく　たまつ
者ゐの武勇と恨中ゐり。今月青より又市殿を殺いなるあり
なるべ　そ　ころへ　ゆく　ゆく　ゆく
と教えれば。まらんを殺てひるり
ゆく　しんぞく　ふじあつ　ふじあつ　ふじあつ　ふじあつ
夕べを絶してぞ悔りける。此親族の中ゐ武術の師範る角右
いつきとのすけ　ものの
衛文ゐ二男。虎之助といつる若者年十四歳ゐして。未ざあげ
ぶじあつ　ちちあく　つまりの
ま死なゐ。武術ふ練磨し。力飽まで つよく。堂〳〵たる若者
つくる　つくる　つくる　つくる　つくる　つくる　つくる　つくる
なりるゐ。彼よ這席よ別ゐて。先ようの右衛門と申ゐ
ちちを　しつせ　きくい　ちちを　ちちを　ちちを　ちちを　ちちを
しゐ。いろふ思ひうん楚しもゐ。兵業と発ひ者で行とたり。馬術の
ちちを　ちちを　ちちを　ちちを　ちちを　ちちを　ちちを　ちちを
方と通き。者で学ゐり帰り。礼儀とあらゆる所ゐる者や
あるいこひ　ちちを　ちちを　ちちを　ちちを　ちちを　ちちを　ちちを
ふいゐうう〳〵業内を。浮留の孤客岩見氏よ存関せんるを
いれ
中入れば。市田屋の妻妾女出むり〳〵て曰。その岩見氏ゐ

今朝隣よ加列とさして出ゐり。豆若殿もゐ送ゐうゐ〳〵。
ちちを　ちちを　ちちを　ちちを　ちちを　ちちを　ちちを　ちちを
彼のしひと對ゐれば。虎ゐの和ゐ者ゐげゐ孫ゐ。まい遠慮の
ちちを　ちちを　ちちを　ちちを　ちちを　ちちを　ちちを　ちちを
事ゐり。孫ゐ今青行ゐ不止者為ゐ年。ゐ三四の修い
ちちを　ちちを　ちちを　ちちを　ちちを　ちちを　ちちを　ちちを
ゐゐ〳〵手と。ゐ入ゐる修ゐ。ゐ者ゐで。妾女の曰。今青ゐ。
ちちを　ちちを　ちちを　ちちを　ちちを　ちちを　ちちを　ちちを
行の修ゐを行ゐ。延命ちとや焼剣ゐ止者とし知ていい。此
ちちを　ちちを　ちちを　ちちを　ちちを　ちちを　ちちを　ちちを
伯徹ハ岩田親族ゐて。必その焼剣ゐ止りひゐり。海
ちちを　ちちを　ちちを　ちちを　ちちを　ちちを　ちちを　ちちを
ゐれば。虎の介ゐと。孫ゐて。妾女ゐ剛者田屋を出ゐや疾ゐる明
ちちを　ちちを　ちちを　ちちを　ちちを　ちちを　ちちを　ちちを
業ゐ方ふいゐうて。系者ゐ竹の修ゐを行べし。此行〳〵と命て
ちちを　ちちを　ちちを　ちちを　ちちを　ちちを　ちちを　ちちを
絶ゐると引出させ。ゐよゐうゐと行ゐ踏ゐ。ゐ縛ゐるゐゐゐ
ちちを　ちちを　ちちを　ちちを　ちちを　ちちを　ちちを　ちちを
ひゐしゐ。ゐち一ゐいく入てかけ出し。ゐゐがゐくゐ生ゐける竹
ちちを　ちちを　ちちを　ちちを　ちちを　ちちを　ちちを　ちちを
の修ゐうてで者ゐ行ゐる
ちちを　ちちを　ちちを　ちちを　ちちを　ちちを　ちちを　ちちを

角弥虎之助追童吉兵之後事

郡境、家に男子童吉ならん。赤田村を過られて、高山を出
れば、くて、如列の地に入。うつうつ孫とも、行路、行脚の里ふるく
延命ちとしつる梵刹、びん観の絵ふ、赤田村
ゞ浪花まうれば、ちゆ一続に市町とりこび。町屋を家居ふ
結而、町庭にて答意をる。かくて名病も海て后、芸州ふ
對て回復しも若、今郡遠に男山と出る所、ひしるみ山麓の
紀、粗推察仕へど。余りに茶卒みていひば卒と、答られ
ば。市吉兵衛、ふて曰、男子の子、家宜しう。拝、来る辺の
家、結に結る。能登、城中の男大城に迫りたれども。子に警敵
のなかりも、之が故。已に来、宅、ちんと欲せ、わ

為にの形に、なかりもの。強るふ、此敵、強ふ、答意為し
時、のそふ、とうかゞ士、為こん、もりけしろ。ふ、しく
見まで、敵、加に、形れ、こう、武辺の、ゆえ、ふ、死者、ふ、こん、絶ハ
来ゞ、慢美と、結ふ、と、ふ、れ、思ひ。稜くの、要侯と、仇、船
て、男、言と、聽せん、ふ、必せり。儀も、来ハ、屑、ふ、ものども
嵐、雲の、英、計に、筆、言ひ、く。辛、ふ、日と、辛、ひ、なば、後、警
の、好、ふ、と。彼、傳、陽、ての、ふ、寛に、懲、く。彼、ふ、速に、出、ふ
いく、ふ、史、且、ふ、跡、て。出、ふ、為、と、ふ、く、解、て、も、強、
と、感、じ。義、ひ、ふ、ふ、の、士。ひ、ふ、平、否、平。ふ、と、も、強、んが、為
ふ、と、ふ、ふ、れ、ば。芸、州、大、ふ、に、感、仰、く、実、大、志、と、信、ふ
ふ、人、ふ、方、ふ。彼、ふ、て、ふ、ふ、ひ、ふ、ふ、ふ、ふ、ん。仰、ふ

ごく。男と思ふまでにいひて。己が捨てなれと掩者どもい
みんなれども。ひあとと慕ひ来るわとの者ひみきごく
ひいんと。信り合ふる者ども。枕次のち傷。ひ出ごく。呂今
ひもの落中。角弱虎之助と尋ひ者を
見ひ。ひ通ひ中へべき年と云ふそ。呂助肩根をひそめてまひ
落中銀蔵の師范ふる。角弱氏の二男ふて。まご前髪の子こ
父敵之の使ふや来りけらん。先知て逃下べ。皆待せ
動めへとく。呂助呂実の方へ立て行たりしが良ふて
めふれ者ふ帰りて。市ふ者ふ対ひて曰。昨日の通り
わ年ふ云関みて面会仕ひ。ふ者ふ武徳を慕ひ
先刻拙宅へ動ひ。若ひ知ふの話申へ来ふ

ふ上ふてあとと追来ふ。偏へよ者問と那ひ云ふく
枕なくを取出られひ。行年四歳云の弱ひ舟宴ひふる
べくとそ枕しふる。市ふ者ふ対して。席を正して行
疲くは出られよ。對面いふべくして。席を正して行
居ふる。呂助直ち射して云ふしぶ。徳ふ呂助の少年と続ひ
出ふ。市ふ者ふ仕をすくめ。徳ふ呂助の少年と続ひ
よ向ふる大鷲の呂者。骨格大ふ力ふ強ふ而。肩秀
服するごく。威儀堂ふたるすぐれたふ者。市
人の骨ふ疲ふれと感じふ。高下少年れと驚て
曰。余い年陸奥ふ出ふ。落中。角弱虎之助と申
者ふてひ。呂の武徳と仰の修ふ。ひあとと慕ひ来ひ而

遠くふ春園と伴宮あるく事。度がくれ仕合みてひしと。濡れば
京ちらも礼を返し。名を通じて。そこ武乃親仙と喋び。虎こゐ
京都で曰。やつぐれ石肖とかくりこび。我々ふんをゆくるく
是程なるまげみ丘人ども来んよ泣くるとこうば。如何みもして
英雄と附属。強く天ゆれ名と農せんとの志敵ふひ。強るふ思
思ふ一富為ふひ。怪見魚退ひ事。ゆるれまの不みう
あるび。是真の宮所こうと知て。弟四あとと業ひひ。約年浜人と
命あるん事と希まるるう。巳。思ふの妖怪と海中武辺の
皆人ある者ども。まぐ強ゆ事。笹家の和尊。隣ふのめ
うるひ。皆ふ思びびるんば。思儀くとたるく。彼妖怪と付とる
べくと。ふ敵へと接ゆるん事と那ひまるなるこ。思ひ入く

教うるで京ちらに所怪ふ塙び。角弟の思良。天弟ちる志武。諸中
ふ人も多うるんよ。抽て。是弟をいくそば。来と義ひ弟ふれ
武乃孰人の役。感ふふ塙こう。宜場世ちるべきの少年こう。
且妖怪と付く。一蔵の和尊と猶ぐんと欲。是ふ和と知るの
士といふべく。系彼接ちる事あり。ちうう約と用ひ人
と。是ふ紙くられば。虎こゐが懐くたる威風ふ
仇く。且寛仁ちて。人と宮ちるの器ちと是威じて。予生
渡の陣へぴ人よ止まうと。ん中頭躍而。是ふ体ちれてはの
間ふ出ちるぶ。皆くくして夕約も渉。再び席ふ思て京ちらと
京ちらの曰。賢良。武乃ハ唯一人ちと立ちよ唯人と仇て勇猛と為
まへ雅く強慶の切よ順て。自得ちれぐ。ん仙術ゆぜぐちと

宇太郎
南部虎之助
封面の図

準的とし。拙ふ強て妖怪なるぞ。みの人形。是を射る人を待ん。
彼と碎て世を愛と思ひんと。多くの雷威を強幼の根
えん空虚ことなり。ぬと宝剣をぶ。雷威強り。神号を号くべ。
鏡の形ゆ思やうくものなり。剛士なる者の義理
とは。一人を治ぬ。ものの名り。寵ることいへ
ば。妖怪迫る事あるべきなり。
偏なるべ。知の名の強弱なるものなれば。兵糧なに
ものを。もん命なるべ。ものつけんとあるべ。ぶ対治べ
技打ちて。おべれ。悪く怪物の。眼を遮ぬよう。三寸をとゆ
べきの史として。技打見て宝と切の乳合と委者雅ん
石動の方と作られば。素材絲別若為。霊物なりられば

雅為に行は海。且雲霧とのらいく。旭日と仰がてく。ぶえられば。
欲ずる所なく。雷鳴を形て雷と指。故而宝名ら嬰師者三世の
鈴と為て。毛家に作る延命ちふ者ありて。ぶれば。ものく。
別と去。再命を弱し。居中平安と繋し。又雷鳴は組合の乳と流。
寺中小附而。再ふ打踏う。雷ぶとそして。ぶ。

虎之助対馬守妖怪事

夫。花騰する神鏡の久蟠蟠と交と為ぶと。絶る角孰虎之助対馬
口のみて。為る鏡は。毛日の牛のみ別する。ぶ。ぶ。
ぶ。ぶ。ぶ。

と陰悔しそうに、続虎之助は、父が敵ひ、まこうと思ひの定まりて。
此歌の御心ばえ有し事と聞くれば、弱無對て因、一切歌は強意
思ひ入氏の武道よりも、事志ばやうひ四人、今一夜敵ひ奇と
落ぬ事ばかり御ありとの、こせく。赤田屋おゐりひさろ
いつたこてや。彼猛宮。そ敵。是助と後よ知えせられし
と。所よ付。そこてこせれる御孔は赤田屋より敵け動く
宮ふく、ゆきう。彼此歌も。事無とれ。ひひしうぐも。彼
用心の為。書辺の舎ねん屋九ゐわしと。彼さ人のうち者と
先て。歌御と敵ひひ。彼りゆきて。歌まの比天井
よも言して。蜻風面をうちひ四人。御のやく皆く戦慄ける
なきて。変如のたち云。彼前よかうる事なく。ひひしやく

さもあ憂乳ふ云りで。虎之助の兄一宿の切ふを
そうて。舎ねん芋。歌ゐ〳〵の御。逆の孫もなく。孤ふ安彼者を
ひ。彼年今宵八来さ人。御と仕らん。氏彼御宮〳〵四人
と。思ひつあうる御うそやれば。素より覚後ふ馬河なる見八
虎之助ゐ御年ふ仏ば。敵乃ふ逆うるとも知ゐ四人ふ。兄と敵
びて。御ゐば今宵の御形みひもうとて。恋ふ奥よ待ば。深来
の歌御の士八時形ゐる。かくて歌ふも動うれば。虎之助を
事ふ云ようゐ按ゐる雨の唯ん方とんふあうて。吉源
の花乃よ園ゐる屋風のこゐふ辞ゆうて。寄岳。看病
の如ゐも。家長醫師ゐど次の間よひざとゐべて御ゐ民祝ふ。
秋の夜も更ゐうて。此升の数八ゐとめゐ人。陰陽ゐる彼風

猛獣のごとく浸し。猛の猛戸はしりしてなりとなく色ふ
怖しきに。例の天井ふるもあるがごとく。曾根平と申すあるを
いなを。怪風飛と面と吹だ。ゆらゆらと男女牙ぐるひしく。皆
一同まぞ狂ふ。虎之助は姫よりして。眼と八方ふ開死
一人と和ふしくゆくうるもび。そられ牙も戦慄そび唯
平生のやふして巻物こうそれども怪異既よ園門よ入し
乎雪女吉原連くと喚雪とのらし。恐言も示きこえこう
虎之助耳ふもかけば彩静度してるるふ。狂なく暁の種
こうくと笑えこうふ怪乎吉原の富中より。白さ繰物
やきものたなびきて。百戸の遠方より出んとする猛そ
えこう。びびふして虎之助。活殺こうして眼をえこう。妖怪ござんれ

と短刀と切抜およ。彼白き煙より。三すりて切付ける。空
おいあくでるくして。西と一変恐とんくしぶ。妖怪百
戸蹴飛逃出るて。虎之助遠ざ。孫猿ふて長ものと組
ど。妖怪をとこくもせば。組もぐくて虎之助を引ふ。
虎に虎ち。樹弓と踏て逃んとすると。虎之助ハ右ふ杉
こる短力して。脇腹とふふと。強弩も撒もくごと刺。
妖怪を眼といくせ。咎付んとのけども。力ときんんく
ふめけくれば。自中ふ事あるそばや。風仏背と揺
むくて。虎之助生くもくせば。拳とかくあくるくく
て。おぐくれの。樹の根よくく推仰くう。くくもの妖怪ふ
ふよくう。のけぞうなぐう吼る多。さも怖くなる

虎之介猛勇の圖
虎之介
妖怪

わざ。此物言に驚れて。歌仙の若ども。やとら沢と搖げ。戦慄
なぐらるれを猫と棄。振捨ふを出れば。次の弓及び結る
ようハ。林樹を尾かけ。ぶつく。猫とあげ名。ぶんてあれば
爭ろろん。角弱虎之助。小牛のやゝ妖怪と組伏く。
服従とさし通しなぐらぶ。そこ刃も背びくとかきむしられ
歩よ腰を取ろうふぞ。皆一同よ仰天ス。虎之助と
相引組さうと。すろふ。虎之助夢とうけく。ふく亦と相る
不及ぞ。這奴此侍報さんも本云事。又まと弱さば逃
んも未ぞ。伝く先に見くと指られよと云。皆ふむろう
とて。ろかるを縄を以に見とあると縛ろうれば。虎之助涙
をとゆるゆ。強力と引そばゆ名紀ろうく。鼻つきてで居

ろろ知ぞ。歌も脇よ引けられまろう。高下人くを考
て。妖怪と見ろふ。さも怖しき古程ろ〳〵。身いまぐらに
ろげて毛八針のやく立。にぐり眼ろうて。大き小牛の
やく〳〵ぶ。後見の付添を切れ。又服ぞをろぐられ。手
ろ人に見を縛られ。鉄ことあくそば。吼ゆ〳〵て。
ろう。皆く舌を巻て。名仏と驚〳〵く。
先一間よ結ひて。ぶるろふ。さもも猛を古程の撥ろうろる
ゆ人ふや。高張弱ろく背びろふ。ぶふやぶまで。紙とうけろう。ぶれ
虎之助肩ともせば。寛くと和体ひろう。かくてこの妖怪成
仕ぞろる。ろ唱ろく。甘えろれば。藩中ろもぞうて先と
見ろんとて。入ろる人ろえぞりろる。手後古程も裏絶ろれば。

投而知の姿をとゞめる。是よりして是が爲に妖怪
の背後を擲くよはるゝ類なれば。是が一統の怪びたるゝんよ
たゝく。併て八尾ゝ和ゞ郎勇是ゝ[illegible]。未志男まゝ[illegible]して
一番のゝれあちゞうし。妖怪と仕為る勳勇八古今堂数多
とて。是と称。是と嘆而止ざるゝ[illegible]。逸ふ[illegible]雷電
ふ[illegible]。生ふ感ふのあまり。改よ名出されて。腦腰要の沈沈
ふ[illegible]れゝれば。尾之助ハさゝ[illegible]。面目と[illegible]
ゝふ。やゝん。那小の幅と。虎ゝ助ゞ[illegible]九郎と[illegible]是を
歌物と[illegible]て。是と[illegible]ゝ。若ども。年少の虎ゝ助ふ。妖怪と
退治為られし事と。嬢ゝ[illegible]ものゝ。稚くの[illegible]を曲
らせ。要[illegible]を喝て曰。彼妖怪ハ。眼よゝ[illegible]ゝ[illegible]

八仕為ふ付。本田屋の[illegible]の秘法と[illegible]
縛ゝ[illegible]ゝ対せゝ。爭少年の虎ゝ助ゝ[illegible]。力を仕
為ゝを[illegible]年。まを[illegible]対為ゝ[illegible]。知止
なゝを[illegible]。虎ゝ助ハ[illegible]。
やゝ[illegible]。今ハ対是ゝ[illegible]。
年ハ。合ゝ[illegible]ゝ[illegible]。[illegible]の礼と[illegible]ゝ[illegible]と
治ゝ[illegible]。生涯と送ゝ勇士の和と
ゝ[illegible]。英雄ハ随順。天下に名を[illegible]
ゝ[illegible]。事の報と一通ハ[illegible]。武[illegible]
[illegible]と号ゝ。十月三日ゝ[illegible]ふ[illegible]と[illegible]
て知ゝ[illegible]。是年[illegible]。是ゝ[illegible]ゝ[illegible]の合戦[illegible]

武切とあらひし。殆本の人名と呼ぶ。巻と共ホあげくる
角弱虎之助良恵是也。且。這虎之助ようして。[illegible]の讐
大川。廣瀬。麻瀬等ゞ彷徨と知るの編と呼ぶ。巻ぎ見と遮ル
及び。或ハ強盜より向ひ或ハ別敬る如今。或ハ其事の為ル遮られ
危急沼亡の間ル縦横而。遂る又兄の讐を報ずるの巻
の組雜及。良善と助け。暴悪と挫ぐの條ゞ。巻と次で死。此編
裁脱迫てきル生。彼岡の君子宜く知之

繪本優警英雄錄之編巻之七 大尾

製本處
東京市日本橋區北久寶寺町
四番地
前川源七郎